



Title	中國語の言語單位：趙元任氏の”syntactic word”について
Author(s)	伊地智, 善繼
Citation	大阪外国語大学学報. 1952, 1, p. 135-148
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80090
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中國語の言語單位

—— 趙元任氏の “syntactic word” について ——

伊 地 智 善 繼

A UNIT OF LINGUISTIC FORM IN CHINESE

(About Yuen Ren Chao's “syntactic word”)

By Y. Ijichi

S u m m a r y

Dr. Yuen Ren Chao postulates, in his *Mandarin Primer* (Harvard Univ. Press. 1948), a linguistic unit “syntactic word” in the Chinese language. The present article introduces his definitions and examples of this “syntactic word”, and deals with the following four points.

- (1) The conception of “syntactic word” is quite akin to that of “bunsetsu” (文節) widely utilized in this country. Yet, the latter is the unit we recognize not only in a single word but also in a combined form of words, and it holds good with Chinese as well as with Japanese. It is not, therefore, all advantageous to apply the term “syntactic words” to the “bunsetsu” and the word altogether.
- (2) The interpretation of “can be uttered alone” as held by Mr. Lien Sheng Yang is inappropriate for proper description of grammar. What Dr. Chao did about it is quite rational, but as far as actual utterances in Chinese are concerned, we have, besides the grammatical particles always bound to other forms to make up a “bunsetsu,” such form classes of weak independence as the adverb or the preposition, of which we are not sure whether they constitute a “bunsetsu” by themselves or together with other forms.
- (3) For the definition of the word, we have to add to “can be uttered alone” the condition “can function in a sentence as a unit by itself.”
- (4) The practical procedures to find out whether or not a certain word has functions valid enough for its recognition as a single word have been demonstrated by many linguists, and are presumably applicable to the Chinese language as well.

I

『國語入門』 (*Mandarin Primer*, 以下 MP と略す) は、1948年ハーヴァード大學から出版された趙元任氏の著作である。今次戦時中米國諸大學における極東語教育は、いわゆる ASTP ('the Army Specialized Training Program') と協力して、極めて大規模に行われた。この ASTP のもとでは、つねに二、三千人の陸海軍學生が、二十五の大學で極東語を學び、その間に科學的教科書の編纂、教員の言語學的訓練が行われ、ひいては極東語の言語理論的研究——それは主として口頭語についてである——が盛んになり、米國人は極東語に自信を持ち、その極東研究をファーストハンドなものにすることができた (『中國語雜誌』 4 卷、1、2、3、4 號所收の拙文「アメリカの中國語學」参照)。趙氏のこの書物は、ハーヴァードにおける ASTP の中國語部門に用いられた教材を平和的目的に合うように改編したものであり、現在同大學の 'International and Regional Studies' のコースにおける集中的言語課程の二學期間 (一年間) の授業に使っている。なお、この本には漢字テキストがあり、この二冊は、1947年に出版された『粵語入門』およびその漢字テキストと、大体同じ方針の下で書かれ、その方針をいつそう發展させたものである。名前こそ入門ではあるが、趙氏という高名な言語學者の、音聲、文法、教授法に關する以前からの研究と經驗が集大成されていて、専門家にとつても十分味讀される必要がある。この本の入門書としての全体的價值について批評することは、今のわたしの目的ではない。(この點については、HJAS に載せられた Griggs 氏の批評を参照されたい。氏は米國國務省の北京における中國語教育センターの責任者として、各種教材の利用についてさんざん苦勞されていたので、その意見は尊重してよい。)

さて、MPの第一部は序論であつて、100 頁程のスペースを占めている。その第一章は中國語概説、第二章は發音とローマナイゼーション、第三章は文法概説である。中國語の言語單位の問題については、Basic Chinese の問題と關聯して、趙氏も古くから考えていたようであるが ('The Idea of A System of Chinese,' *the Quarterly Bulletin of Chinese Bibliography*, VOL. 1, No. 4, 1934)、この文法概説で一應の解決を與えていると見られる。syntactic word, free word, bound word という考え方がそれである。free form とか bound form については、すでに Bloomfield 氏によつて述べられているのであるが、趙氏がこれを中國語に適用しようとしたことは、MP の序文からも想像できる。この文章においては、これら言語單位に關する概念を紹介し、かつ二、三の問題について論じ、さらにできうれば私見の一端を開陳してみたい。なお、この概念について、ジョンホプキンス大學の John De Francis 氏、ロンドン大學の W. Simon 氏が、それぞれ FEQ, VOL. 7, 1949, *Asia Major*, VOL. 1, 1949 に意見を述べて

おり、*Concise Dictionary of Spoken Chinese* (『東洋文化』3號, P. 116 の拙文参照、以下 CDSC と呼ぶ) を趙氏と共編した楊聯陞氏がその反論を HJAS, VOL. 12, 1949 に書くなど、かの地の中國文法學界の興味ある論題になつているかのように見受けられる。また、中國本土においても、拉丁化運動の進展につれて、分ち書きの問題が眞剣に考えられるようになったが、これは當然この概念と交渉を持たないわけには行かない。事實、倪海曙氏の辭圈は syntactic word に、また同氏の基本辭素、附加辭素は free word, bound word に似たところがある。

さて、趙氏は中國語文法研究における二つの部門を明かにして、syntax とは syntactic word という面からする construction の研究であり、morphology とはこれらの成分たる morpheme の面からする syntactic word の研究であると云う。氏の定義によると、他の言語における word (以下語と呼ぶ) に似た中國語の言語單位としては、次のようなものが挙げられる。

人、有、每一、今一、一的という單位は、子供が學校で教わり、電報局の事務員が料金を勘定する單位であつて、中國人の社會生活で大きい役割を果している。これは「字」という單位であつて、西洋人の中國語學者は、これを“word”と譯している。しかしながら、さらに深く文の構造を分解して行くと、獨立して發言されたり、あるいは非常に自由に結合することの可能な syntax 的下部單位 (“the syntactic subunits which are capable of being uttered independently or combined with a high degree of freedom”) があつて、それはしばしば一音節もしくはそれ以上の結合体であることが發見される。このような syntactic unit は、他の言語における語にいつそうよく似ている。中國人文法家はこれを「詞」と呼んでいる。たとえば、人、有、每一回、今·天、知·道、一定。概してこの種のうち多音節よりなるものは、particular, random, patter という堅い單位ではなく、cranberry, teacher, windmill といったタイプの語にいつそうよく似ている。そこで、趙氏はこの二つをともに word (従つてこの word は言語學で用いられる嚴密な意味で使われていない) と呼び、區別する時は前者を“morpheme” (「字」) 後者を“syntactic word”と呼んだ。しかし、これだけでは、これらの單位の概念はなお十分理解することができない。趙氏はこの場所以外にさらに syntactic word について説明しているが、この概念をいつそう理解するために、續いてそれを引用しておく。さて、完全文においては、その主題の部分とそれに對する説明の部分との間に、休止があつたり、また休止を示す particle の 啊、呢、囉 が現われて、二つの部分に分離される。しかしまた、この二つの部分の内部においても、syntactic word は 呢一、あるいは 噯[ɲ:]、這·個一·這·個 のような口ごもつた音聲、そしてより頻繁には最後の母音の延長によつて分離することができ、一方また complex syntactic word の途中では、このようなやり方で口ごもることはない。もし、口

でも話し手やどもりが、syntactic word の途中で引つかかったならば、最初からもの一度繰り返す。たとえば、我 要 理一、理一、理一髮。この事実を、趙氏は「單獨に話すことができる」(“can be uttered alone”) ものと認めているようである。

以上は、文を分解して行つて、syntax を構成する直接の単位として、syntactic word を取り出したのであるが、一方視角を変えて、syntactic word を形成する単位の方から見ると、一つの word (「字」) で一つの syntactic word を形成するものと、二つあるいはそれ以上の word で一つの syntactic word を形成するものの二種あることが、當然豫想せられる。そこで、趙氏は、好、霧のように、一つの word が同時に syntactic word であるばあいには、それを“free word”(「自由字」) と呼び、今一、一年のごとく、一つあるいはそれ以上の word (たとえばそれらが free であれ bound であれ) が結合して、syntactic word を形成しなければならないならば、それは“bound word”(「結合字」) であると呼んでいるのである。中國語の言語單位に關する氏の基本的定義は、大体以上のごとくであつた。

II

幸いにも、MP ではすべてローマナイズされており、しかも、趙氏の syntactic word は通例一語に綴られているということであるから、實際どのようなものが、syntactic word と認定されたか、一見して知りうるはずである。こゝでは、なるべく MP に収められたものを引用し、かつ説明の便宜上、できるだけいろいろの種類形式を選ぶことにする。(國語ローマ字の代りに、漢字を用いて分ち書きした。漢字の前の・印は、その音節が輕聲音節であることを示す。)

(1) 人、我、來、大、能、是、從、跟、嘍。

(2) 蘿・蔔、噉・咕。

(3) 玩兒、椅・子、石・頭、尾・巴、甚・麼、他・們、殺・了、等・着、認・得、我・的。

(4) 面・善、護・書、利・害、心・理、卓・上、拼・法、大・使、一・塊、吃・飽、進・去。

以上の多くは、一語に綴られている。

(5) 頭・疼、喝・水、白・紙、不・好。

(5) に屬するものは、多くはハイフンを用いて連結してあるが、不・好(副詞+動、形容詞)の種類形式は、取り扱いが一定しない。大・笑ではハイフンで連結し、先・走は二語に綴っている。

(6) 殺・了 人・了、等・着 他・們、我・住・的。

(6) に屬するものは、個々のばあいによつて、幾語に綴つてあるかは一定しないのは當然である

が、了、啊、的は一語に綴つてある。

さて、(1)の形式は、morphemeが同時にsyntactic wordになるばあい、これをfree wordと名づけたことは、すでに述べた。この free word と呼ばれるものには、通例名詞、代名詞、動詞、形容詞、助動詞（いわゆる前附助動詞）、前置詞、接續詞、感嘆詞と云われるものが含まれ、一から十までの數詞、指示詞、補助名詞、方位詞、文末助詞などの形式は含まれていない。このことは、MPの文法概説及び多數の例から分る。(2)に屬するものは、通例二つの漢字によつて書かれている。通時的に見れば、形態論的に錯綜したものであろうが、共時的に見れば、二音節の morpheme と考えた方が都合がよいと、趙氏は見ている。これらは、極く少數のわけの分らない語源のものや外来語である。(3)の形式は suffix が添加された syntactic word である。趙氏は中國語には少數の suffix があるだけであるが、それらは非常に頻繁に現われると云い、diminutive suffix (一兒)、noun suffix (一子、一頭、一巴)、modal suffix (一麼、一m)、人稱代名詞と人を表わす集合名詞の複數語尾 (一們、一m)、完成された動作などを表わす word suffix (一了)、新しい位相や、敘述における發展を表わす phrase suffix、進行的動作を表わす suffix (一着)、可能性または能力を表わす suffix (一得)、從屬的suffix (一的)に分類する。prefix と infix も少數あるが、ここでは省略した。

(4)に屬する種類は、compound と呼ばれ、二つの word よりなる syntactic word と定義されている。趙氏は、これらの形態論的手續は、中國語にあつては、非常に重要なもので、morphologyから分離させ、別に標題を着けて一節を設ける價值があると云い、かつ七種の分類法を掲げ、この分類法を適用すると、錯綜した分類の無限の細別に導かれるであろうと述べている。この論文の目的には、直接關係のないこともあるが、煩をいとわないで引用しておく。七種の分類とは、(a)その成分の一つが輕聲であるか否か(烙餅と燒餅)、(b)その成分の一つが bound であるか、また free であるか(烙、燒に對して、柿一)、(c)その成分が syntax 的關係にあるか否か(買賣は等位的關係にあるが、打手にあつては、他動詞打は modifying particle 的なしには syntax では用いられない)、(d) compound は、それを構成する word の片一方、あるいは双方と同じ文法的機能を持つてゐるか否か(燒餅は餅の一種だが、買賣は双方とも動詞であるにも拘らず名詞である)、(e) compound における word の一つが、morpheme, suffix の着いた word、あるいはそれ自身 compound であるかも知れない(瓜子兒において、子兒[<子+一兒]は suffix の着いた word、山查糕において、山查はそれ自身 compound である)、(f)その諸成分は、非常に活動的な word であるかもしれないし、またもつぱら極く稀な compound にのみ用いられるかも知れない(有意は双方とも活動的であるが、惡心の惡は

このcompound以外には餘り用いられない)、(g.最後に若干のbound wordは非常に活動的であつて、一時的なことばが作られ、また他のものは、意味上合成されており、その成分の意味を知っているものには、その compound の意味を推量できるが、これ以外になお辭典的な性質を持っている compound があつて、たといその成分が分つていても、新しいことばとして學ばなければならないものがある(那—雙は一時なことばであり、好看は合成的 compound であり、月・亮は辭典的 compound である)。(4)に並べたものは、各成分間の syntax 的關係を基礎にして排列した。最初から順に、主語—述語 compound、動詞—目的語 compound、等位的 compound、從屬的 compound (この中、卓・上は方位詞 compound、拼・法は從屬的動詞—名詞 compound、大使は形容詞—名詞 compound、——塊は決定詞—補助名詞 compound)、動詞—補語 compound。さて、複合語というものは、他の言語にあつても、語と考えるか連語と考えるかは、從來からはつきりしない。(4)を compound と呼んでいるが、趙氏の word が語と同じ意味でないように、compound も言語學で一般に定義されている複合語とは同様でない。

(5)に屬するものは、大体において常に密着した單位であつて、趙氏によると、その構造は一つの syntactic word を作るほど緊密であるとか、また、syntactic word と phase の中間にあると表現されている。このうち、頭—疼は主語—述語 construction、喝—水は動詞—目的語 construction、白—紙、不好は從屬的 construction である。

(6)趙氏が suffix の中で phrase suffix という種類を設け、word suffix と區別したことは、すでに述べたが、この phrase suffix は、phrase (または sentence) 全体に着いて、その phrase を一つの syntactic word たらしめると定義され、また particle と呼ばれている。morphology で phrase suffix として挙げられているのは、了 だけであるが、また從屬 suffix の 一・的を phrase suffix として取り扱つてもいる。嗎、吶、罷… については、文法概説では殆んど觸れていないが、MP の索引では particle としているから、了 と同様のものと考えているのであろう。従つて、殺・了 人 了…… を一つの syntactic word と考えているのである。

III

他の言語における語に一番似ている單位として、中國語の言語から抽象された syntactic word が、一体どのようなものかは、以上の定義と實例によつて、ほぼ見當がつくと思う。さて、從來の中國文法家も、他の言語の語に當る單位として、同様に詞という單位を認めており、この兩者は大体同じものを指していると考えられる。かくて、第一に注意すべき點は、この兩者が果して

同じであるのか違っているのか、違っているとすれば、どのように違っているのか、ということであろう。先ず定義の上から見れば、この両者は明かに違っていると思う。もちろん、従來の中國文法家の意見と一概に云つても、必ずしもすべて一致しているわけではない。しかし、大体一致していると思われる點は、詞を意味の最小の單位と見なした點であろう。黎、劉などの諸氏はいずれもそうである。そして、實際上の手續としては、英語と比較して常識的にどういう形式が詞であるかを認定したのである。事實、これら諸學者は、このような問題を深く考えたわけではなく、その定義も外國文法書のものをそのまま借用したまでである。黎氏の「一つ一つの觀念を示すもの」というのは、恐らく氏が北京の鐵路學堂にいた頃に習つた A. Read という人の英語の學校文典などによつたものであると云えるだろうし、劉氏の「意味上の最小の獨立單位である」と云うのは、“ultimate independent sense unit”という英語が附記されているところから見て、明かに Sweet 氏の N. E. G. を焼きなおしたものであつて、しかも independent ということばは、正しく考えられていないと思う。最近の中國文法家は、この點において非常に進歩している。陸志韋氏の意見については、ここでは説明することはできないが、改めて十分検討するに値するものと思う。また王力氏のごときは、「最小の意義單位」とか「一つの簡単な意義單位」という風に、従來の文法家と一見變らぬ定義を與えているが、一方では、(1) 英語と中國語との對譯 (speak と說話) によつて決定することは不可であると戒め、理論的には一切の仿語 (phrase) はいずれも一つの單詞 (single word) の用途に等しく、また一切の單詞も、すべて仿語になることが許され、(2) ある一つの概念は甲族語では單詞によつて表わされ、乙族語では仿語によつて表わされ、その逆も可能であり、かつこの二原則は中國語でも證明することができる (稀飯と粥) と論じ、ある種の疑わしい形式については、それらの中間に他の形式を挿入することができるかどうかという方法を試みている。従つて、王力氏の定義はその表現が適切でなく、いわばマルチの内部的言語形式に似た概念を意識していると云つてもよいだろう。しかし、なお多くの文法家は、文字言語の上で素朴な意味の考察を行い、中國語の詞と云う單位を認定して來たと云つても過言ではない。これに反して、趙氏の定義は、音聲言語の外形に重點を置いて、syntactic word という中國語の單位を設定しようとしている點、從來と非常に違っている。初めに少し言及したように、この趙氏の定義も、實は Bloomfield 氏の語に對する定義に基礎を置いているので、趙氏の定義をいつそう理解するために、ここに Bloomfield 氏の定義を引用しておく。Bloomfield 氏によれば、言語形式は先ず free form と bound form に大別され、「決して單獨に話されることのない言語形式が bound form であり、その他はすべて free form であり」「二つあるいはそれ以上のより小さい free form よりなる free form は phrase であり、二つあるいはそれ以上の free form よりならないもの、すなわち、最小の free form が word で

ある。」趙氏の syntactic word は、この「最小の free form」とは決して同じではないが、しかし、これに基礎を置いていることはまちがいない。

さて、「單獨に話することができる」というのを、趙氏が、休止などによつて前後から分離され、その内部に音聲のときれを含まないものと解釋したとすれば、syntactic word の概念は、わが國の文法家の云う文節と全く似た概念と云えるだろう。このように「文を分解して最初に得られる単位」が、いわゆる語と全く相等しいものであれば、文法家は言語の単位を設定するのに苦勞することはないが（そのばあい、文節と語と區別する必要もない）、現實の言語は必ずしもそのようなものではない。中國語についても、同じことが云えると思う。たとえば、上例の（1）—（4）までの syntactic word は、從來の中國文法家は大部分一つの（または複合した）語と見るだろう。これは一文節即一語のばあいだと云える。しかし、一方一文節が語を連結した形式に當るばあいもある。たとえば、不 走、很 好、他 嗎、吃 吧 などは、從來の中國文法家は一音節の副詞や文末助詞を一語と見、從つてこれらを語の連結した形式と見るであろうが、趙氏はこれを一つの syntactic word と見ているようである。事實、中國語においても、文節に當る単位はやはり認められるであろうし、これを詳しく觀察する必要はあるが、文節と語を區別しないで、ともに syntactic word という単位でかたづけることは正しくないと思われる。たとえば、趙氏は 不 走、很 好 を一つの syntactic word であると云いながら、またこれらの成分たる不と走、很と好をそれぞれ一つの単位として、それらの關係を subordination と考え、これを syntax の中で説明している。上に述べたように、syntax は syntactic word の面からする construction の研究であると定義されているから、不や很是 syntactic word として取り扱われていることになり、事實またそうである。また、品詞とはそのメンバーが syntactic word であるところの形式の種別であると定義されているから、不 走、很 好 を一品詞と見なければならぬし、あるいはそう見ることもできるかも知れないが、趙氏は結局これらを一品詞とは見ていないのである。同様に、趙氏は 他 嗎、吃 吧 を一つの syntactic word であると云いながら、これらの成分たる 嗎、吧 を morphology で説明していない。morphology は morpheme の面からする syntactic word の研究であると定義されているから、當然これらは morphology で扱わねばならないはずである。品詞論でこういう品詞を立てていないのは云うまでもない。第一、（6）の形式が一つの syntactic word であるということは、syntactic word の定義と矛盾する。このように、文節と語を區別しないで、ともに syntactic と呼んでいることは、MP の文法概説を少し理解しがたいものにさせている。もちろん、入門書のことであるから、趙氏は論理の一貫よりも、使用の便宜を考慮したのであらうが、實際文末助

詞などは、それを一語と見なし、その機能、意味について説明しなければ、中國語の語法を明かにすることはできないと思われる。

もつとも、從來の中國文法家が、一音節の副詞や文末助詞を語と認めたのは、それらが意味上何らかの單位をなすことを意味論的に反省したわけではなく、文法家としての良識がそうさせたのであろう。語は眞に意味的單位をなさないと云うのが、意味論家の定説でもあり、趙氏のように外形に重點を置いて定義することは、正しい態度であると認められるが、*嗎*、*吧* のようにいつも他の獨立しうる語と一緒になつて一文節を作る語もあり、*不*、*很* のように一文節となるか否か疑わしい語もあるから、「單獨で話することができる」というだけでは、文節の定義としてはよいが、語の定義としては十分でなく、いかなる形式にも首尾一貫して適用することはできない。*不*、*很*、*嗎*、*吧*などを語と認める理由は、なお別にあるのである。周辨明氏のように、語は單なる印刷上書寫上の慣習であつて、何ら合理性のないものだと言う人もあるが、語に正確な定義を下すことは難しいと云うのであれば、まことにそうであるが、中國語の文法を記述するのにそのような單位が必要でないと言うのであれば、賛成することはできない。

III

「單獨に話すことのできる」形式が、文節であつて語でないことは、上に述べた。従つて、語の定義としては、なおべつに考えなければならないが、それを論ずる前に、そもそも「單獨に話することができる」ということは、一体どのような事實を指し、それらはまた簡単に觀察することができるかどうか、という疑問が起るだろう。第二には、これについて論じて見たい。MP がこれをどのように解釋したかは、すでに見て來たとおりである。一方、CDSC では、楊氏の論文に明かであるように、完全なそして自立的發言（すなわち、その後に full pause が設けられる）と見、こういうものに該當する形式は free として扱い、さもなくば bound として扱つた。その結果、多くの名詞、多くの數詞、代名詞、動詞、形容詞、すべての時間詞と場所詞、そして感嘆詞は free であり、補助名詞、副詞、接續詞、文末助詞は、常に bound であり、またこのことは一音節の形式はもちろん、複音節のものにも適用され、事實複音節の名詞は殆んど全く free である、とされたのである。さて、言語學者が他人の發言を傍で聴取し、ある形式が完全なそして自立的發言として現われるか否を觀察するのは、事實としてはかく簡單ではないと思われる。というのは、中國語の多種多様な形式について、いつもうまく觀察しうる機會を持つとは限らないからである。そこで、恐らく楊氏は、自らあるケースを想定し、問いを發して自ら答えるか、

他人に答えさせるか、どちらかの方法を取ったのであろう。陸氏も『北京話單音詞彙』を作る時には、こういう方法によったと思う。しかし、それにしても、ある特定の形式については、かなり特種なケースを想定しなくてはならず、報告者の教養、階級、年齢などによつて種々の反應があり、それらを綜合することは容易ではない。たとえば、「你去了嗎？」に對し、「沒！」と答えることが、最近の若い人の好みに投じているということだが、楊氏はこれを正しいことば使いとは云えないからという理由で、沒を free と認めなかつたと云っている。（云うまでもないが、「該說一個人還是一隻人？」というような問い方をしてはならない）また、ある種類の形式がいつもすべて free として現われるとも限らないであろう。つまり、free と云い bound と云つても、その中間にいろいろの段階のあることが考えられる。これについて、CDSC の序文の脚註（ちなみに、この書物の主要概念と序文は趙氏の手になつた）には、注目すべきことが述べられている。それによると、一樣に free と認められる動詞についても、中間のタイプが存在していて、「你抽煙嗎？」「抽。」のように、習慣的狀態と行動を表わすものは、通例單獨に現われるのであるが、「站・着」「站・了」のように、不定の狀態また變化する狀態を示すものは、他の形式と一緒になつて現われる傾向にあると云う。この意味において、恐らく絶對的に free なのは感嘆詞だけであるかも知れない。従つて、CDSC の記載も、必ずしも絶對に完全なそして自立的發言として現われるか否かを基準にしているわけではない。

MP では、「單獨に話すことができる」というのを、休止などによつて前後から分離され、その内部に音聲のとぎれを含まないものと解釋したのであるが、これはことばの自然さを破壊しない程度に、話し手が發言内容を意識しながら、できるだけゆつくり話すということを、前提にしなければならないと思う。かつて、Karlgren は音節群が同じ“phrase”に屬する限り、一つの音節の聲調が、これに隣する音節の聲調に影響されるという現象を觀察し、“phrase”という語に、二つの（呼氣及び調音を同時に兼ねた）休止の間に含まれる各音素を指すという定義を與え、

我 父 親 || 今 天 晚 上 || 不 在 一 家

という例を示した。しかし、この單位は syntactic word という單位と全く同じでない。われわれがこれらをよりゆつくり發言すると、

我 | 父 親 || 今 天 | 晚 上 || ……

とさらに區切つて話すことができなくはないからである。が、これ以上區切つて、

我 | 父 | 親 | 今 | 天 | 晚 | 上 ……

と云えば、それは漢字のつづきで、自然な發言とは云えない。Karlgren のいう“phrase”は、いわば聲調群とも云うべきで、syntactic word とはことなるものである。が、それはさておき、

このような文節という単位がはつきり観察できるか否かということになると、やはり疑問であると思う。たとえば、文末助詞という形式は、殆んど他の語とともに一文節を作り、それ自身文節を作ることはない。それは、文末助詞が輕聲となることによつても分る。中には、しかし、的という形式のように、

你 這兒 的 菜、都 好吃

のばあい、這兒が強調されると、的 が前の形式から分離され、的 と這兒との間のとぎれと、
・的と菜との間のとぎれを比較すると、前者のとぎれが後者より常に短いと云い切れぬばあいも少くない。白話文にも、假如他曾有過「悲觀」——他是從來沒有悲觀的的話というような文章が見られ、そう珍しいものではない。このばあい、的 がかなり前の形式から分離される。服部四郎氏が日本語のノ、ニ、オなどについて観察されたが、そのことは中國語の的 についてもあてはまるようである。（もつとも、他們的苦惱、的災難、的掙扎、的滅亡 という文章があつたが、これは全く破格的なものであると思う。）もつとも、これは 的 という文末助詞に限られた現象であつて、一般の文末助詞は殆んど他の語とともに一文節になると云えるだろう。しかし、副詞などについては、趙氏の云うように、常に他の語とともに一文節となるかどうかは疑わしい。

他 不好

の不好は、不と好との間のとぎれはたしかに短い。不是、不能などに到つては、かなり固い單位を形成し、不は臨時的輕聲となるほど弱まつて来る。このばあい、しばしば、接頭辭的様相を呈することは、Kennedy氏なども認めるところである。別（く不要）、甯（く不用）などは、さらに固い單位で、必ず一文節に發言されねばならない。しかし、

我 也 跟 你 一塊兒 去 吧、

你 這兒 的 菜 都 好吃、

那 麼 我 們 先 預 備 預 備 吧、

那 太 便宜 了

などにおいて、これらの副詞については、趙氏の云うように後行の形式との間のとぎれが、必ずしも先行との間のとぎれよりも短いとは言えないであろう。これらの例は、倉石「拉丁化新文字中國語課本」のレコードをゆつくり廻わして、幾度も観察したが、中にはむしろ先行の形式と一緒になつて一文節を形づくるようなばあいさえ見られた。これに反して、趙氏は前置詞、接續詞などを syntactic word と見ており、またそう見ることは正しいが、具体的な發話においては、必ずしも獨立して一文節となるとは限らないと思う。たとえば、

我 們 拿 字典 查 查 吧、

我 們 到 鄉 下 去

などの拿、到はかなりはつきり文節を形づくると思うが、

請 你 叫 .他 到 這兒 來

我 也 跟 .你 一塊兒 去

などの叫、跟はむしろ後行の形式と一緒に一文節を形づくると云つていい。また・和や・把には weak-form がしばしば現われるようで、これらは常に後行の形式と一緒になつて一文節を作る可能性がある。かく見て来るならば、中國語においても、一文節か二文節か、具体的な發言を観察するだけでは、決定しがたいものがあると思えると思う。趙氏自身、不好を除いた(5)の形式について、一文節か二文節かはつきりとは云っていないのである。

V

楊氏は、De. Francis 氏の CDSC に對する批評に答えて、語というものは正確に定義することができないから、便宜的に漢字一字を一つの word と見なして、一字一字について、free か bound を附記した字典を作つたのだと答えている。そう立場からは、「單獨に話することができる」ということを、楊氏のように解釋することは使用者にとつて理解しやすく、CDSC は事實能率の高い字典だと云える。しかし、また楊氏は、漢字一字について、free か bound を注記する字典は、それ自身今後の重要な研究に役立つ知識の源泉であり、すべての動詞は殆んど free であろうか、……等々という W. Simon 氏の質問に答えて、これは非常に重要な暗示であると思つて、中國語の‘free and bound parts of speech’を論じた時、CDSC では決して「單獨に話することができる」かどうかを唯一の基準にして free and bound を決定したのでないことを告白せねばならなかつた。たとえば、MP では連續した動詞的 expression の最初のメンバー、すなわち、前置詞、接續詞と呼ばれる形式、爲、在、從、打、解、比、把、給、讓、被、管、拿などや跟、和などが free word と認められているのに、CDSC では、在、比、把、讓、管、拿だけが free と認められ、残りの爲一、從一、打一、解一、給一、被一やまた跟一、和一が bound と認められているのは單獨に話「すことができる」ということに對する解釋の相違に原因する。同様にまた、二音節の副詞、可、是、若、是、假如、雖然なども MP では syntactic word であるが、楊氏は bound であると考えている。がしかし、以上の例をよく見ると、在、比、讓、管、拿は明かに主要動詞に用いられており、これに反して、把は全くそういうことはない。しかも、CDSC を読めば、把は外に主要動詞（しかも、これに補語や、動詞に對する補助名詞、また主要動詞の重複、たとえば、把這個吃了、把他打一頓、把屋子收拾收拾）がある時にのみ用いられることわつてさえる。にもかかわらず、楊氏はこれを free としたのである。これは、恐ら

く把が pre-transitives (前置他動詞) という品詞または品詞の下部区分に属するものと考えられたのであるだろう。また、楊氏の告白によると、這 (ㄓㄜ, this thing) を free とし、這 (ㄓㄜ, ㄓㄜ, this) を bound にしたのは、前者が主語となり、後者が主語となり得ないということであった。ある語がある品詞に属するということは、その品詞特有の機能を以つて他の語と関係することであろう。この強形式と弱形式を二つのちがつた語と考えることについては議論もあろうが、それはさておき、ある形式が主語になるということは、語と語が連結して連語となる時の語の文法機能を意味している。かくて、第三には、指摘しなければならないのは、われわれが語というものの資格を定義するばあい、「單獨に語することができる」とともに、それ自身一体として語の中で機能するものであることを考えねばならない、ということである。

趙氏が、主語—述語 compound は、凍結した単位であり、眞實の主語—述語 construction は語の挿入を許すと云い、また、動語—目的語 construction は syntax と morphology の中間にあり、それらが特別の意味を持ち、実際に動語—目的語として使われていない時は、compound として扱つたらよいと述べている。たとえば、

他 很 面 善、他 不 面 善

と云えるが、

他 面 很 善

他 面 不 善

とは云えない。反對に、

他 心 不 好

他 心 很 好

他 不 是 心 好 的

と云えるから、面善は一語であり、心 好は二語である。また、

他 頭 不 疼 了

他 不 頭 一 疼 了

のように、正しく語と連語の中間に位置するようなものもある。さらに、

我 護 了 一 本 書

と云えないが、

我 喝 了 一 碗 涼 水

と云えるから、護 書 は一語であり、喝 一 水は一文節となる可能性は多いが、二語であると云うべきであろう。ある形式が一語として認めるに十分な機能を持つか否かは、趙氏のこの例が一つ

の見本を示すように、いろいろな手續によつて觀察しうる。Bloomfield氏も free form は「文として現われる」と云いながら、絶對的地位にあつて文を構成するか否かという嚴密な區別を設けることの不可能を説いて、種々の方法を構じている。Jespersen 氏は他の形式を中間に挿入しうるかどうかを原則とし、この原則は“unmistakable linguistic-criteria”に依據していると云う。これに對して、中國語にはこういう原則は不適當として、「同形替代式」という極めて煩雜な手續を、陸氏は提倡している。服部四郎氏も、あらゆる言語に適用しうるという包括的原則を立てている。

VI

これに關聯して、最も重大な事項は、文末助詞、接尾辭、副詞、前置詞、接續詞、補助名詞などは、果して具体的にどのような手續によつて、これを一語と認めうるか否か、ということが問題になるであらう。しかし、これについては與えられた紙數を超過しているので、次の機會に譲らねばならぬ。